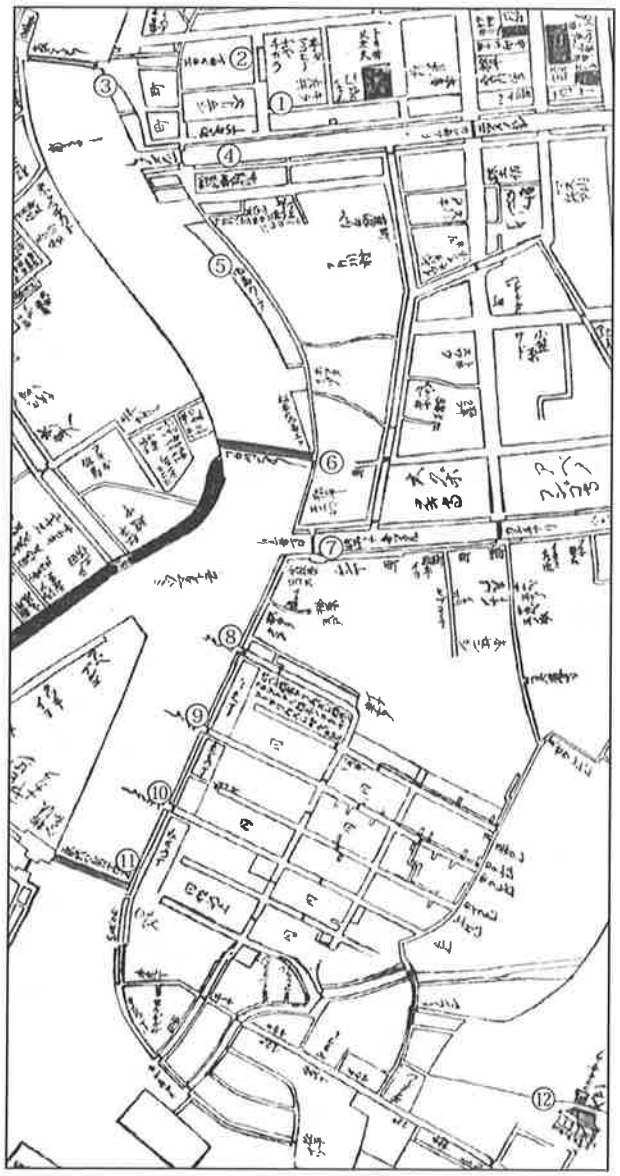
資料館ノート　第67号　　平成19年1月16日発行

隅田川と江東地域　⑤

赤穂浪士と隅田川東岸

江東区深川江戸資料館

時は元禄15年12月14日とくれば、赤穂浪士が吉良邸に討ち入り、見事本懐を遂げた日であることはご承知のことと思います。また、映画やテレビ・ドラマで、槍先に吉良上野介の首を結びつけて泉岳寺へ向かうシーンもお馴染みですが、その際に歩いたのが、本所から深川を通り永代橋を渡るという隅田川東岸の道でした。今号は、この浪士引き揚げの道をたどります。



地図　改撰江戸大繪圖 元禄15年(1702)

吉良邸裏門から両国橋

吉良邸跡(本所松坂町公園)

見事本懐を遂げた一行は、吉良邸(地図①)裏門から近くの無縁寺「回向院」(地図②)に向かい、そこで追手に備え、前後の様子を見極めて、両国橋下から舟で移動することにしていました。『堀部弥兵衛金丸私記』には、上野介の首は舟で運び、泉岳寺の浅野内匠頭の墓前に供えること、討ち入りの時間、引き揚げの手段・ルートなど、討ち入り計画の詳細が記されています。

錦絵や歌舞伎などに、両国橋（地図③）を渡ろうとしたところを阻止される場面が登場しますが、毎月15日は月例の御礼日(諸大名、旗本などが将軍に謁見する式日)にあたっており、当日は五ツ時(午前8時)までに登城することになっていました。したがって、そうした大勢の目に付くルートは、最初から避ける計画だったというわけです。しかし、関わるのを恐れてか舟の貸し手がいなかったようで、やむを得ず、陸路に変更し、隅田川東岸を南下することにしました。

一之橋と一ツ目通り

『江戸名所図会』本所一目辨財天社深川八幡御旅所

明暦3年(1657)の大火以後、本所・深川の再開発事業が進められます。その際、両国橋が寛文元年(1661)、現在の位置よりやや上流にかけられました。他にもいくつかの掘割が開削され橋がかけられましたが、そのひとつに隅田川・

中川間を東西に結び、本所と深川の境になる竪川が、万治２年 (1659) に開削されます。これにかかる橋を隅田川から東に数えて、一之橋 (通称一ツ目橋)、二之橋…、その橋を渡る道路を、一ツ目通り…といいました。浪士は両国橋東詰から最も近い一之橋（地図④）を渡り深川へ入りました。

『名所江戸百景』
大はしあたけの夕立

新大橋から万年橋

このあたりから新大橋にかけて、御船蔵 (地図⑤) がありました。広重の錦絵が有名です。“あたけ” というのは、官船の安宅丸がおかれていたことから、後に安宅町というようになったためです。元禄６年 (1693)、現在の位置より 200m ほど南にかけられた新大橋（地図⑥）を右手に見て、さらに南下しました。

『富嶽三十六景』深川万年橋下

江戸時代、万年橋（地図⑦）は富士山が見える名所で、北斎の錦絵にも描かれています。一行はどんな心境でこの景色をみたのでしょうか。

深川元木場と討ち入り蕎麦

万年橋を渡り更に進むと、深川江戸資料館総合展示室のモデルになっている深川佐賀町に入ってきます。改撰江戸大繪圖 (表面) をみると、上の橋、中の橋、下の橋（地図⑧⑨⑩）と、狭い範囲に連続して橋がかかっており、その東側は縦横に多くの水路と「此ヘン材木アリ」という文字があります。日本橋からこの地に移ってきた木置場ですが、ちょうどこの時代、一時的に猿江 (現在の猿江恩賜公園) を経て、元禄 14 年 (1701)、木場 (現在の木場公園) に移りました。それによって深川元木場といわれるようになりました。

二八そば屋台

浪士は蕎麦屋の２階に勢揃いし、討ち入り蕎麦 (“手打ち” 蕎麦にかけて) を食べたという話がありますが、元禄時代の蕎麦屋は、左のような屋台形式がほとんどで、また、手打ち蕎麦という呼称も使われていませんでした。ただ、『寺坂私記』によると、討ち入り当日、集合場所に向かう前に、吉田忠左衛門、原惣右衛門ほか７・８人が、両国橋向川岸町の亀田屋という茶屋に立ち寄って、そば切りを食べたことが記されています。これが元になったと思われます。

永代橋と富岡八幡宮

『江戸名所図会』永代橋

永代橋（地図⑪）は、元禄 11 年 (1698)、現在より 100m ほど上流、深川から箱崎に架けられました。この百年あまり後の文化４年 (1807)、富岡八幡宮（地図⑫）の祭礼に際し、落橋事件が起こりました。翌年には復旧しましたが、多数の死者が出る大惨事でした。もちろん浪士は、最初の架橋から３年後の永代橋を渡りました。また、討ち入り計画を行うために、内蔵助が同士を召集した場所が、永代橋からほど近いこの富岡八幡宮前の料理茶屋でした。

上野介在邸情報とエピソード

吉良と親交のあった山田宗偏の門弟となっていた大高源五から、茶会開催の情報が入ってきました。これをもって上野介在邸と判断し、12 月 14 日の討ち入りが決定しました。ただし、討ち入り日の元禄 15 年 12 月 14 日というのは、当時、夜明けから一日を数える習慣だったためで、正確には 15 日未明になります。また、旧暦での日付で、しかもこの年は閏年だったので、新暦にすると、翌年の１月 30 日にあたります。

源五の俳句を通じた縁がもたらしたエピソードがあります。永代橋のたもとに、元禄元年 (1688) から現在も続く「ちくま味噌」(創業時は創業乳熊作兵衛商店) が存在します。初代店主は、芭蕉の高弟の宝井其角を通じて源五と交流があり、引き揚げの際に一行を招き入れ、甘酒粥を振舞ったといわれています。

こうして、浪士は永代橋から箱崎 (現在は霊巌島にかかっています。) に渡り、さらに霊巌島、鉄砲洲を通って高輪の泉岳寺へ向かいました。